

## 報 文

## 甲斐虎山と京都女子大学 ―大学所蔵の作品を中心に―

前崎 信也<sup>1</sup> 村田 隆志<sup>2</sup> 阿部 亜紀<sup>3</sup> 北山 明乃<sup>4</sup>

Paintings by Kai Kozan in the Collection of Kyoto Women's University

Shinya Maezaki, Takashi Murata, Aki Abe, Akino Kitayama

Kai Kozan (1867-1961) is a Japanese Nanga painter and is considered as one of the last artists of Bungo Nanga tradition continued from the time of Tanomura Chikuden (1777-1835). Kyoto Women's University houses 81 works by the artist (12 works are registered as gakuho, or "school treasure" and 69 works are in the collection of the Kyoto Women's University Library). He worked many years as the headmaster of Bunchū Jogakkō, the predecessor of the university. It was after the retirement from teaching profession in 1914 when Kai Kozan became a professional painter. Since 2019, the authors of this paper started a research project and organized three exhibitions focusing on his paintings. The purpose of this paper is to reveal the early life of Kai Kozan and his role in the history of the university while showing early important works in the collection of Kyoto Women's University.

## 1. はじめに

甲斐虎山（かいこざん：1867-1961）は大正から昭和期にかけて、大分と京都で活躍した大分県臼杵市出身の南画家である。田能村竹田（1777-1835）から続く豊後南画の伝統を受け継いだ山水画だけではなく、同時代の中国の水墨画にも通じる繊細な筆致と大胆な構図の作品で知られる。京都女子大学にとっては創設に多大な功績を残した甲斐和里子（1868-1962）の夫として、甲斐駒蔵の名で紹介されることが多いため、彼が大正3年（1914）10月に教職を辞した後の画家としての経歴を知る人は少ない。（図1）

2019年から2020年にかけて、計3回の甲斐虎山の作品展を企画した。令和元年（2019）秋、枚方市の天門美術館主催での企画展「甲斐虎山～昭代文雅之巨擘～」(会期：10月6日～27日)、令和2年（2020）京都女子大学創基100周年記念事業の一環として再

び天門美術館を会場に「甲斐和里子・虎山の世界」(会期：10月1日～23日)、そして、京都女子大学建学記念館「錦華殿」において「南画家 甲斐虎山の芸術」(会期：12月11日～1月15日)を開催した。これらの展覧会の準備を兼ねて本論の著者4名が中心となり調査を進めてきた。本論ではそれにより判明した、甲斐虎山の業績と京都女子大学との関わりを明らかにすることを目的としている。



図1：甲斐虎山と和里子  
京都女子大学所蔵

<sup>1</sup> 本学准教授

<sup>2</sup> 大阪国際大学国際教養学部国際観光学科 准教授

<sup>3</sup> 本学大学院家政学研究科生活環境学専攻 博士後期課程

<sup>4</sup> 本学大学院家政学研究科生活造形学専攻 博士前期課程

## 2. 京都女子大学所蔵の甲斐虎山関連資料

京都女子大学は2020年12月時点で81件の甲斐虎山の絵画作品を所蔵している<sup>1)</sup>。虎山の作品は他に、出身地である大分県立美術館、大分市美術館や、アメリカのミネアポリス美術館などにも所蔵されているが、所蔵作品数としては京都女子大学が最大級のコレクションを有している。この内、学宝となっているものが12件、図書館所蔵の準貴重書となっているものが69件あり、ここには和里子が和歌を書き、虎山が絵を描いた合作も13件含まれている。更に、京都女子大学同窓会「藤陵会」の所蔵になっている2件の作品がある。

学宝として登録されている作品には、学園の関係者や甲斐家から寄贈されたものが多い。虎山が羽裏に竹と梅を描いた甲斐和里子旧蔵の下り藤の紋付の羽織のような珍しい作品もある。他方、図書館所蔵品は学宝同様に大学関係者から寄贈されたものもあるが、平成3年(1991)年に虎山の蝶図に和里子の和歌が書かれた短冊(カラー図版1)<sup>2)</sup>が購入されて以後、継続的に購入されてきたものが大半を占める。

絵画作品の他にも、図書館には虎山に関連する書籍の所蔵がある。昭和10年(1935)にまとめられた虎山の漢詩集である『苦瓜庵百絶』、昭和13年(1938)に藤井石童がまとめた評伝である『甲斐虎山(昭和美術百家選 第19編)』、そして、虎山の没後に支援者たちが編纂した作品集『虎山先生遺墨畫冊』の3件である<sup>3)</sup>。このほかに後述する、清国渡航時に彼が使用した通行許可証の「執照」が収蔵されている。

## 3. 先行研究

京都女子大学創基に関わる人物でもあった甲斐虎山だが、これまでその業績や経歴に関する研究はほとんど行われてこなかった。大学案内などで紹介される内容は、京都女子大学名誉教授の籠谷眞智子氏による『甲斐和里子の生涯』(自照社出版、2002年)を参考しているようである。本論の内容も籠谷氏の研究によるところが少なくない。画家としての実績をまとめたものについては、先に挙げた藤井石童による『甲斐虎山』以外に詳述したものはない。

これは、近代以降の日本の美術史上で注目された

人物のほとんどが、国内外の博覧会や、政府が主催する官展で活躍した人物であるということと関係しているのだろう。虎山は画壇と距離をおいていたため、画家としての受賞歴がなく、美術研究家たちの積極的な研究対象となってこなかった。そういった背景をふまえて本論では、数少ない先行研究の中でも藤井石童の『甲斐虎山』記載の履歴の検討を行うとともに、今回新たに判明した内容を加えて、京都女子大学の歴史における甲斐虎山の役割を大学所蔵の作品の紹介も兼ねて述することとする。

## 4. 誕生から専業画家になるまで

『甲斐虎山』掲載の経歴についてはこれまで詳細な検討が行われていないため、その内容についてまずは検討を行いたい。以下、生誕から上京までの履歴は藤井による『甲斐虎山』、上京後から教職を辞するまでは籠谷による『甲斐和里子の生涯』に記載の内容を軸に虎山の経歴について整理する。

甲斐虎山こと甲斐駒蔵は慶應3(1867)年、豊後国海部郡臼杵海添に父千代蔵、母ミツの長男として生まれた。名は簡、字は厚甫、虎山と号した。別号に玉壺道人、梅花道者、醉竹頭陀、苦瓜庵などがある。

郷里の菊川南峰から漢学を学んだ後、明治17年(1884)、戸次にいた大分を代表する南画家である帆足杏雨(1810-1884)に入門した。同時期に松岡の真宗大谷派寺院 浄雲寺の相馬松陰(1844-1885)と、その弟の城陽(1867-1908)、そして詳細は不明であるが三原活山という人物から詩を学んだという。松陰と城陽は詩だけではなく絵画の腕でも知られる人物である<sup>4)</sup>。杏雨は明治17年(1884)に、松陰はその翌年に没しており、駒蔵がこの4名から学んだのは長くても1年間程であっただろう。

明治18年(1885)、駒蔵は日田の咸宜園に入塾した。ここは、廣瀬淡窓(1782-1856)によって文化2年(1805)に創立された全寮制の私塾である。かつての門下生には維新の志士として知られる大村益次郎(1824-1869)、専念寺の画僧で詩・書・画に通じた平野五岳(1809-1893)、そして、第23代内閣総理大臣を務めた清浦奎吾(1850-1942)らがいた。上述の『甲斐虎山』の巻頭の題字は清浦によるものだが、

清浦と虎山は咸宜園の先輩・後輩にあたる。

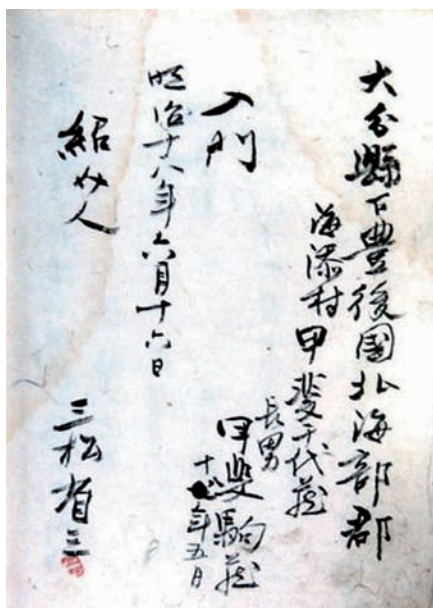


図2：「咸宜園入門時の証文」  
日田市教育委員会所蔵

駒蔵が咸宜園で学んだのは明治18年からの1年間程であると考えられ、入塾時の塾主は大分森藩の藩儒であった村上姑南（1818-1890）、そして、明治19年2月からは日田の公立教栄中学校の校長であった廣瀬濠田（1854-1914）であった。同年中に駒蔵は宮崎県高輪に移り、旧臼杵藩主ですでに隠居していた秋月種樹（1833-1904）に師事し漢学を学んだ。種樹はこの後、明治23年（1890）に元老院議員、そして明治27年（1894）には貴族院議員となった人物である。このように上京するまでの彼が九州有数の画家や儒者から学んで関係を築いていたことは、甲斐虎山研究において重要な視点となるであろう。

明治25年（1891）に上京した駒蔵は、漢学者の伊藤介夫（1833-1912）に就いて経史を学んだ<sup>5)</sup>。伊藤は江戸幕府の清国への特使派遣の際に通訳として同行しこともある人物で蔵書家としても知られる<sup>6)</sup>。また、絵画を森寛斎（1814-1894）に学んだという記録もある<sup>7)</sup>。そして、彼の人生に最も大きな転機を与えた出来事が、西本願寺の勧学であった足利義山（1824-1910）と知り合ったことであろう。詳細な経緯はわからないが、駒蔵は明治28年（1895）11月から31年（1898）3月まで、広島博鑑校の教

師となり倫理・漢文・歴史・作文などを教えている。ここは本願寺が全国25学区に設置した教校のひとつで、足利義山が住職を務める勝願寺にあった<sup>8)</sup>。そして、この駒蔵の広島時代に義山の娘である和里子と結婚したとされている。明治29年に和里子は同志社女学校を退学しているが、これは同年に駒蔵と結婚したことが理由と考えられる<sup>9)</sup>。

明治30年（1897）から駒蔵は大谷派真宗京都中学校や真言宗高等中学林で漢文や図画を教えていた。そして、明治32年（1899）、仏教研究者であり顕道書院の経営者であった松田仁左衛門と甲斐和里子が連名で顕道女学院を創始したため、駒蔵はそこで講師として教壇に立った。しかし、翌明治33年（1900）に夫婦二人が揃って退職し、私塾・文中園を設立した。

この年に駒蔵が描いた作品が、京都女子大学同窓会「藤陵会」が所蔵する《厖鍾植図》である。賛に「明治庚子孟春寫於平安寓居 虎山學人」とある。この作品から既に明治33年の時点で「虎山」号を使用していたことがわかった。後述する他の大正初期の作品も虎山銘であり、既に明治後期から「虎山」という画号をつかっていたと考えられる。彼の孫にあたる甲斐道太郎氏は、この号の由来は、故郷の臼杵海添にあった虎尾山からとったものという話を虎山本人から聞いたと述べている<sup>10)</sup>。

明治34年に文中女学校に改称した時に駒蔵は校長に就任し、倫理・漢文・図画を、和里子は家政・国文・英語の授業を担当した<sup>11)</sup>。しかし、学校の運営は厳しかったようで、和里子は編み物の内職をし、駒蔵は十銭の白扇に画を書いて二十五銭にして売っていたという逸話も残っている<sup>12)</sup>。残念なことに、彼がこの当時に描いたと確認できる扇はいまだ発見されていないが、虎山作の扇や扇面に描いた作品は図書館に数点所蔵されている（カラー図版2）。

夫妻で10年以上も経営を続けていた文中女学校は明治43年（1910）に終焉を迎えることとなった。校長である駒蔵は私立京都高等女学校を買収し、文中女学校と合併。その数か月後、駒蔵は西本願寺・仏教婦人会連合本部に同校の全権能を移譲して校長を辞任した。京都女子学園はこの連合本部による学校運営が始まった1910年を創立年としている。



和里子は60歳で退職する昭和2年（1927）まで学園での教育に携わった。しかし、駒蔵はそれよりも13年も早い大正3年（1914）に教職を辞している。理由は年老いた親の静養のために大分県の別府に滞在するためであり、この時から彼の専業画家としての人生が始まった。翌年には父の千代蔵が逝去、大正8年には母のミツが逝去しているが、その後も虎山は長年大分を活動拠点としていた。

大学には退職後まもなく描かれた作品が2点所蔵されている。まずは図書館所蔵で大正5年（1916）作の《秋江孤舟図》（カラー図版3）である。「大正甲寅長沙游次 虎山生寫」とあり、大正5年に中国の長沙に行ったことがこの作品から判明した。彼は中国と朝鮮を何度か訪れているが、現在までに判明している中ではこの作品が最も古い外遊の記録である。長年、南画や経史を学んできた彼にとって中国訪問は念願だったことだろう。

学室となっている甲斐虎山作の《泉石高隱図》（カラー図版4）も大正5年（1916）の作である。虎山自身が題を画中に篆刻で書いている作品には意欲的な優品が多いが、本作もその例にもれず初期の代表作と呼べるものである。制作年である大正5年に学校が取得したとの記録が残っている。

虎山は大正10年（1921）にも中国訪問を果たしている。この時に使用した通行許可証の「執照」（図3）が近年発見され、現在は図書館に収蔵されている。

虎山の中国絵画への憧憬や研究は古作に限ったものではなかった。図書館所蔵の《絶壁懸泉圖》（図4）は同時代の中国絵画を髣髴とさせる斬新な構図を見せる。先人に学ぶだけではなく、新しい絵画を生み出そうという姿勢が見て取れる作品である。この他にも大正期の作品としては大正13年の年初に描かれた《富士図》（カラー図版5）が図書館所蔵となっている。白雲たなびく瑞々しい富士の朝焼けが印象的な作品である。

紙幅の関係からこれ以降の甲斐虎山の画家としての生涯や作品については他稿に譲るが、大正後期から昭和初期にかけて、下関・大分・鶴崎・京都・岡山・東京などに後援会である「虎山会」が相次いで設立された。おそらく、そういった後援者から依頼



図3：「執照」1921年  
「執照」京都女子大学図書館所蔵



図4：甲斐虎山《絶壁懸泉圖》  
京都女子大学図書館所蔵

を受けて絵や詩を描くことで、最晩年に至るまで生計を立てていたのだろう。そこには、昭和2年（1927）、60歳で京都女子高等専門学校と京都女子高等学校を退職した妻の支えもあった。実業家で衆議院議員も務めた吉田磯吉（1867-1936）が絵を依頼し大金を支払ったところ、和里子はその大部分を返還し決して受け取らなかったという<sup>13)</sup>。虎山は他の多くの画家のように、有名になることや、経済的に豊かになることには興味を示さなかった。藤井石堂が『甲斐虎山』の冒頭で、そんな虎山の人となりを

以下のように評している。

甲斐虎山は現代人として稀有の存在である。詩書畫共に至妙の技を有し乍ら多く世間に知られず、自づから亦た知らるゝを欲せず、常に詩書畫の三昧境にあるを楽しむの外、何物をも知らざるものゝ如し、彼の風豊に接すれば、如何にも茫洋として古の謫仙を眼前に偲ばれる<sup>14)</sup>。

甲斐虎山は現代人として珍しい存在である。詩や書、絵画に素晴らしい技を持ちながら、世間に知られることはなく、自らも世の中に知られようとしないで、常に詩・書・画ばかりの生活を楽しむほかには何にも興味をもたないようだ。彼の風貌を見ると、とても茫洋としていて、かつて天上界から人間界に追放されたという仙人が目の前に現れたかのような。(著者による現代語訳)

このように、大分時代から研鑽した漢学の素養を背景に諸国を遊歴し、文人としての生き方を貫いた甲斐虎山は、昭和36年(1961)9月24日に95歳の生涯を閉じた。妻の和里子もその後を追うように、翌年11月27日に逝去している。

## 5. おわりに

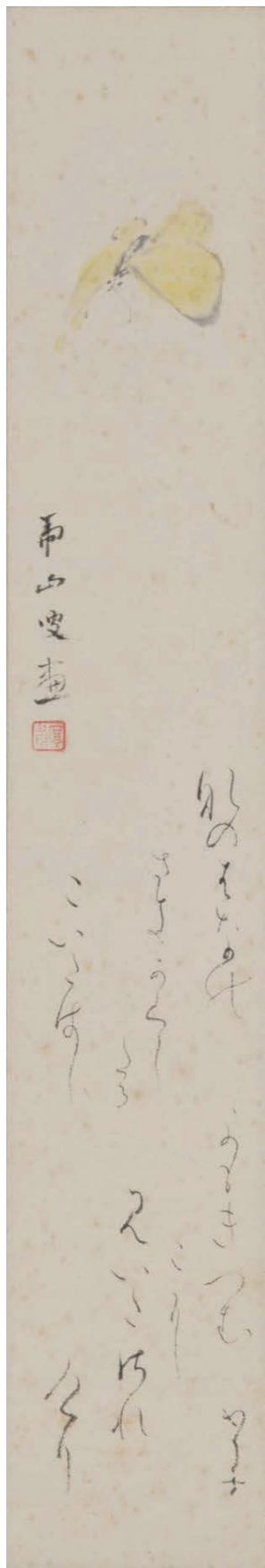
以上、甲斐虎山の生涯について『甲斐虎山』に依拠して整理を試みた。画壇と距離を置き、美術専門誌などをはじめとする当時のマスコミと疎遠であったために、残る情報は限定的ではあるが、彼の作品に付された自賛や『苦瓜庵百絶』などの漢詩に、その心境は吐露されている。これらを読み解きながら、より多角的に虎山の画業に迫っていくことが今後の課題である。

末筆ながら本研究を進めるにあたり多くの方から助言をいただいた。特に甲斐家の皆様、公益財団法人天門美術館には大変お世話になった。ここに改めて御礼申し上げます。

## 注

- 1) 貼交屏風など1作品の中に複数の作品が含まれるものもあるが、大学の登録数として81件とした。
- 2) 甲斐虎山画・甲斐和里子詠《短冊》制作年不詳、京都女子大学図書館所蔵(資料ID:0004551770)
- 3) 虎山甲斐簡厚甫『苦瓜庵百絶』(奥田耕策、1935)。藤井石童『甲斐虎山(昭和美術百家選 第19編)』(美術日報社1938)。「虎」は「虎」の異体字である。京都女子大学図書館の表記にならって本論では「虎」を用いた。河野秀夫、高倉木圭編『虎山先生遺墨畫冊』(安藤登、1968)。
- 4) 大分県立美術館に相馬松陰《老緑落鼎図》、相馬城陽《仙境酒宴図》の所蔵がある。
- 5) 伊藤介夫については以下を参照。湯浅邦弘編著『増補改訂版懷徳堂事典』第四章「三、懷徳堂の交友・門人」(大阪大学出版会、二〇一六年)。
- 6) 誕生から伊藤介夫に師事するまでの虎山の経歴は、特に記載のない限りは、すべて藤井前掲書 pp4-5に記載の内容をもとに検証したものである。これ以後の経歴については籠谷眞智子『甲斐和里子の生涯』(自照社出版、2002年)掲載の内容からまとめた。
- 7) 京都女子学園学園史編纂委員会編『京都女子学園八十年史』(京都女子学園、1990年)、pp3-4
- 8) 広島県編『広島県史 年表(別編1)』(広島県、1984年)
- 9) 籠谷前掲書、pp53-55。
- 10) 籠谷前掲書、pp65-66。臼杵で地図等の調査を行ったが虎尾山という山を確認・特定することはできなかった。地域で使われていた俗称であると考えられる。
- 11) 京都女子学園前掲書、p70。
- 12) 籠谷前掲書、pp93-94。
- 13) 藤井前掲書、p3。
- 14) 藤井前掲書、p1。

カラー図版



〔左〕 カラー図版 1

甲斐虎山画・甲斐和里子和歌《蝶図》紙本著色

京都女子大学図書館所蔵

〔右上〕 カラー図版 2

甲斐虎山《青緑山水図扇面》紙本著色

\*図書館の登録名は《扇面図》

京都女子大学図書館所蔵



〔右下〕 カラー図版 3

甲斐虎山《秋江孤舟図》1914 年、紙本淡彩

京都女子大学図書館所蔵





カラー図版



カラー図版 4

甲斐虎山《泉石高隠図》1916 年  
紙本著色

京都女子大学所蔵



カラー図版 5

甲斐虎山《富士図》1924 年  
紙本著色

京都女子大学図書館所蔵